

たりても見分がたし、夜に入て焼る刻限には、四面皆火也と云、外國のもの、たま〜此事をきけば、身の毛もよだつてをの、く事也、

○按ズルニ、此書草津ノ所在ヲ信濃トセシハ誤ナリ、蓋シ草津ハ殆ド上野ト信濃トノ境ニアレバ、當時或ハ信濃ノ草津トモ云ヒシカ、

伊香保温泉

〔宗祇終焉記〕おなじ國野○上に伊香保といふ名所の湯あり、中風のためによしなど聞て、宗祇はそなたにおもむきて二かたになりぬ、此湯にてわづらひそめて、湯におる、事もなくて、五月のみじか夜をしもあかしわびぬるにや、

いかにせむ夕告鳥の玄だりおに聲恨むよの老のねざめを

〔北國紀行〕山中をへて、いかほの出湯に移りぬ、○中略

一七日いかほに侍りしに、出湯の上なる千巖の道を遙々とよぢ上りて、大なる原あり、其一かたにそびえたる高峯あり、ぬの岳といふ、麓に流水あり、是をいかほの沼といへり、

〔日本洞上聯燈録七〕上州青龍山茂林寺大林正道禪師、濃州人、俗姓源土岐之族也、弱冠從父宣遊相府、一日抵圓覺寺、悵然發出纏志、遂薙染、徧扣洛下相州諸尊宿、復還郷省親、因參龍泰花叟和尚、執侍三年、一日叟問曰、江南野水碧於天、中有白鷗間似我、汝道是明甚麼邊事、師下語不契、後如上州伊香保浴温泉次、忽爾有省、直赴濃州、呈所解叟可之、相隨既久、蓋到堂與矣、應仁改元、受請住最乘乳香供花叟之法恩、

四萬温泉

〔類聚名物考地理三十五〕四万温泉之來由記

抑上野國吾妻郡四万の郷の温泉は、昔日延曆年中、坂上田村丸爲東征に此郡に來り、此山巡狩し給ふ折節、御心不例おはします時、一人り老翁忽然として田村丸の前に來りて告テ曰、此所に名湯有り、將軍此湯にて浴し給ば、則病苦を治し給ふべし、又は諸人のため、願ば將軍此地江温泉を